

王者は京葉 OLC

クラブカップ7 人リレー

2002 年 8 月 25 日 三河高原

三河高原が熱く燃えた
クラブカップが7 人制になって
から連覇を続けてきた多摩 OL
を破って、新たに王者の座に就
いたのは京葉オリエンテーリン
グクラブだった！

アンカー松澤が決めた！

前半のランナーでは京葉 OLC が一時独
走体制に入りかけたが、中盤で他のクラブ
が意地を見せて盛り返した。チーム白樺・
京葉 OLC・多摩 OL の3 チームが1 分以
内のうちに6 走から7 走にタッチするとい
う大接戦が繰り広げられ、手に汗握る展開
となった。この勝負を決めたのは京葉 OLC
のエース松澤。大本命のエースとそれに続
くリレーを展開したチームの勝利だ。

また、ベテランカップでは地元愛知 OLC
が念願の初優勝を果たした。

前日まで冷涼だった三河高原がこの日は
快晴となり、三河高原が大接戦に熱く熱く
燃え上がった。燃え上がったのは上位チ
ームだけではない。クラブカップに参加した
すべてのランナーとサポーター、そして主
催者も燃え上がった今年のクラブカップだ
った。

2005 年世界選手権にむけて

2005 年に愛知県三河高原で開催される
世界選手権に向けて、国内・国外からの選
手団を迎えるに当たって数多くのトレー
ニングマップがこの三河高原に作成するこ
とが予定されている。

本大会は、2005 年世界選手権のプレ大会
第1 弾ということで、世界選手権のトレー
ニングマップの事前公開に併せて開催され
た。

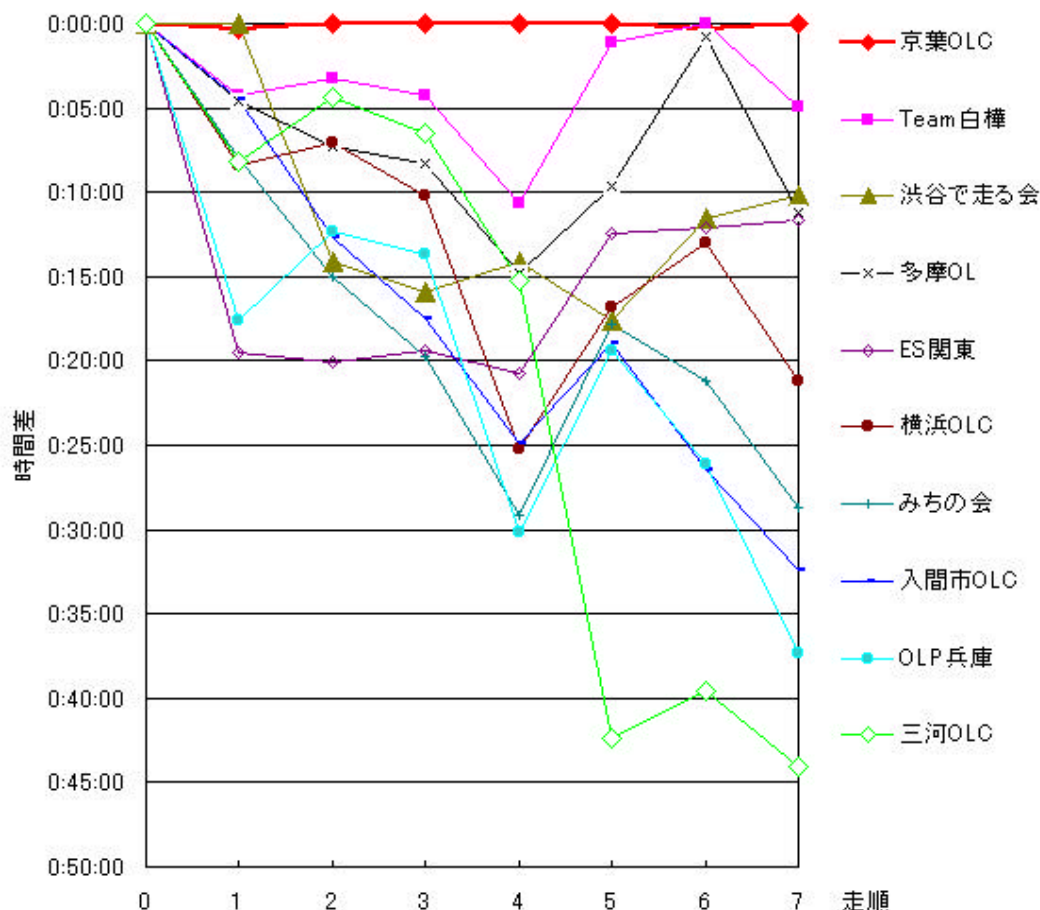
真夏の大会における課題も

トップクラブ同士が激しくつば競り合い
を演じることもクラブカップの魅力の一つ
だが、クラブカップのもう一つの魅力とし
ては、年に何回もオリエンテーリングをし
ない愛好家でも、クラブの戦力として充分
活躍し、かつ楽しめるというものがある。

しかし、今年のクラブカップはテレイン
の制約があるとはいえ、久しぶりに野山を
走る者にとっては、ちと荷が重いコースセ
ットであったことも事実である。特に真夏
の暑い時期に行われる行事であるため、地
図で見る以上に厳しいレース展開となった
ようだ。

事実、今回のクラブカップにおける7 人
のタッチリレー完走率は史上最低となって
しまった。

クラブカップ上位10クラブの推移



また、今回はビジュアル区間が無かった。これはチームメイトを応援する機会が少ないというだけではなく、チームサポートによる給水の回数も少ないと言う事であり、真夏の大会では危険ですらあったかもしれない。



▲ベテランカップ優勝の愛知 OLC

来年のクラブカップに向けて

主催者側も今回の難易度設定については反省している。クラブカップは上位常連のクラブだけの競技会ではない。オリエンテリングクラブに集まる皆が、それぞれの立場で楽しめるイベントを目指している。

そこで来年のクラブカップ 2003 では、走区によってもっとマイルドな設定にするべきだという意見が、今回の運営陣から多く出されている。それを具現化するために、例えば第4走・第5走だけ、地図縮尺を1:5,000 に替え、距離を短くしてよりテクニカルコースとしてはどうか、という意見も出ている。

来年も、愛知県作手村にてクラブカップが開催される。テレインもほぼ内定している。今度のクラブカップでは、会場横ビジュアル区間を設定し、チームメイトに対する応援と給水を可能にする。そして上記のテクニカルコースが設定できる会場レイアウトとなっている。



▲今回優勝した京葉 OLC
チームリーダーの小山

参加者が造り上げた クラブカップ 10 年の歴史

「クラブには年齢・性別など様々な人がいて、活躍するべきであり、その人たちが正に評価され、活躍する場が設けられるべきである。」

クラブカップ主宰者の山川氏の発想から始まったクラブカップ7人リレー。さまざまな人がほぼ一日がかりでリレーを繋ぎ、一つのレースを達成する。このコンセプトに多くの賛同が得られ、今や日本最大級のオリエンテリングのイベントにまで成長した。最初のイベントから10年。クラブカップの価値は常に参加者により作り続けられ、これにあわせる形でクラブカップの形態も変化してきた。

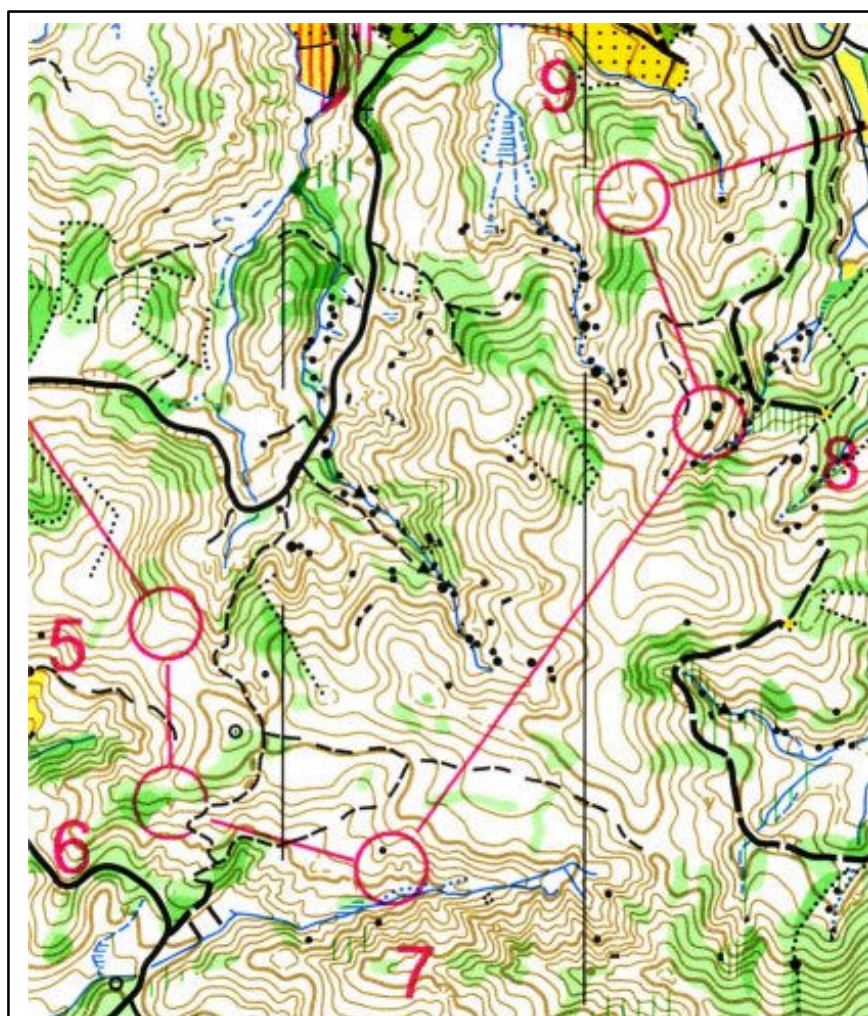
これらクラブカップの理念を文章にしたものが「クラブカップ参加資格」である。

手などを一定数含むことを義務付けている。この参加資格は主宰の山川氏が毎回決定をしているが、それにあたって多くの参加者の意見を聞いている。今回のクラブカップが終わった直後から、様々な人々からこの参加資格についての議論がインターネットを飛び交って、まさに話題沸騰というところである。

しかし、声を大にして発言する人だけがクラブカップの参加者ではない。声を出さないが自分たちにも楽しめると判断する人たちが多くいる。

市場のマーケティングでいえば具体的な「ニーズ」だけではなくこうした「ウオント」まで心配りを行うことこそが、今後のクラブカップの価値をより大きなものとしてゆくことになるだろう。

(おわり)



▲今回の7走エース区間で使用された地図部分
真夏でも素晴らしい通行可能度を誇り、高い体力水準と、高い技術を要求する。
2005年の世界選手権でも、このようなコースが組まれるかも。

今のクラブカップ参加資格では、男女混合リレーを基本として、これに年齢制限選